

# 理解不能な動機の社会的構成

—— 豊川主婦殺害事件（2000年）を事例として ——

赤 羽 由起夫

## Abstract

On May 01, 2000, a male 12th grade student (aged 17 years) in Toyokawa in Aichi prefecture killed a housewife (the Toyokawa case). When questioned about his motive for the murder, he claimed that he wanted to experience what it felt like to kill a person. The purpose of this study is to clarify the social construction of the incomprehensible motive of the commitment of murder for its own sake. This motive for the murder is still considered inconceivable despite the fact that in the Toyokawa case, the young perpetrator was diagnosed with Asperger's syndrome. This paper focuses on the assigned motive of a person with Asperger's syndrome and utilizes the theory of vocabularies of motive and membership categorization analysis to examine newspaper articles pertaining to the Toyokawa case.

The results of the study demonstrate the following: the distinctive personality and appearance of the male student and the trigger for the Toyokawa case may be explained by the characteristics of Asperger's syndrome. However, the motive for the murder cannot be rationalized by this developmental disorder, since experts have clarified that adolescents with Asperger's syndrome are less likely to commit crimes than youngsters who are not afflicted by this condition. Therefore, the criminal motive of the Toyokawa case cannot be justified by the teenager's Asperger's syndrome.

Key Words: Asperger's syndrome, vocabularies of motive, membership categorization analysis

## 要旨

2000年5月1日、愛知県豊川市の高校3年生（17歳）が主婦を殺害するという事件が起きた（豊川事件）。この殺人の動機についての少年の供述は、「人を殺す経験をしてみたかった」というものであった。本研究の目的は、殺人を目的とした殺人という理解不能な動機の社会的構成について明らかにすることである。豊川事件では、少年がアスペルガー症候群であると診断されたものの、その動機は

依然として理解不能なままであると見なされた。本研究では、アスペルガー症候群の少年に付与された動機に着目して、動機の語彙論と成員カテゴリー化分析を用いて、豊川事件に関する新聞記事を分析する。

本論文の結果は、つぎのとおりである。まず、少年に特徴的な性格と様子や、豊川事件のきっかけ要因については、アスペルガー症候群の特徴によって説明された。しかし、アスペルガー症候群の少年はそうでない少年よりも犯罪を起こす可能性が低いという専門家の指摘によって、殺人の動機を発達障害から説明することはできなかった。そのため、豊川事件の動機は、少年のアスペルガー症候群によって説明できなかったのである。

キーワード：アスペルガー症候群、動機の語彙、成員カテゴリー化分析

## 1 はじめに

### 1.1 問題関心

本論文の目的は、殺人を目的とした殺人（以後、自己目的的殺人と表記）を対象として、理解不能な動機が構成される方法を明らかにすることである。そのために本論文では、2000年の豊川主婦殺害事件（以後、豊川事件と表記）の新聞記事を事例として、動機の語彙論（Mills [1940] 1963=1971）と成員カテゴリー化分析（Sacks 1972a）の視点から分析する。

2000年5月1日、愛知県豊川市で主婦が殺害され、その翌日、交番に出頭してきた高校3年生の17歳少年が逮捕された。この事件は、少年の動機が「人を殺す経験をしてみたかった」というものだったと報じられたため（『朝日新聞』2000.5.3朝刊、1面；『毎日新聞』2000.5.3朝刊、1面；『読売新聞』2000.5.3朝刊、1面）、一気に社会の注目を集めることになった。この動機をめぐるのは、その当初から「それが動機なら不条理で、理解できない」<sup>(1)</sup>（『読売新聞』2000.5.3朝刊、30面）とされ、精神鑑定を経て「発達障害」の一種である「アスペルガー症候群」との診断がなされたものの、最後まで「解明されていない」<sup>(2)</sup>（『毎日新聞』2000.12.26夕刊、9面）とされたままに終わったのである。本論文がこの豊川事件に着目する理由は、少年犯罪報道における動機の社会的構成の方法について明らかにするために有用な事例だからである。以下で説明したい。

動機の社会的構成に関する研究は、動機の語彙論の強い影響のもとにおこなわれてきた。その提唱者であるチャールズ・W・ミルズによれば、動機とは行為の事前に行為者の内部にある心の状態ではなく、行為の事後に行為者の外部の社会の言語活動によって付与される語彙である。そのため、動機は、行為を説明する必要が生じた際に、「なぜ～？」という問いに対して、「～だから」と答えるための社会的な語彙に依拠したものなのである（Mills [1940] 1963=1971）。そこで、動機の語彙論では、動機をめぐる人びとの言語活動を記述することを課題として設定することになったのである。

この発想は、犯行動機の社会的構成にも適用できる（土井 1988a, 1988b; 狩谷 1998; 大貫・松本 2003）。しかし、現代の少年犯罪の動機をめぐっては、つぎの2つの課題がある。それは第1に、「心の闇」に代表される動機の理解不能性の問題と（平川 2005; 鈴木 2013; 牧野2015）、第2に、「発達障害」（「アスペルガー症候群」を含む）に代表される精神疾患による説明の問題である（赤羽 2012; 木村 2008; 佐久間 2012）。なぜなら、1990年代以降の少年犯罪においては、動機の理解不能性が問題となり、精神医学による説明が試みられたものの、結局は理解不能なままに終わるという展開が繰り返されたからである（鈴木 2013）。このような事態に対して、現代社会における動機の語彙の機能不全を指摘する研究もある（牧野 2015; 鈴木 2013）。しかし、本論文では、これとは別の視点から説明を試みたい。それは、動機の語彙が機能していないのではなく、「動機の文法」（Blum & McHugh 1971: 105-6）が機能しているという視点である。なぜなら、本論文で明らかにするように、「発達障害」の場合、それを犯行動機と結びつけないという実践が見られたからである。つまり、概念間の結合と分離の規則としての文法が機能しているために、精神疾患のカテゴリーと動機とが結びつかず、動機が理解不能になっているのである。

この発想は、エスノメソドロジーにおける成員カテゴリー化分析から導かれたものである。成員カテゴリーとは、「人びとを記述するのに使用できる社会的タイプないしは分類」（山田 2001: 197）であり、精神疾患も成員カテゴリーの一種とみなすことができる（大貫・松本 2003）。成員カテゴリー化分析は、動機の語彙論と接合することによって、成員カテゴリーと犯行動機との関連を記述するのに用いられるようになっている（狩谷 1998; 大貫・松本 2003）。

以上の問題関心から、本論文では、豊川事件における「人を殺す経験をしていなかった」という動機と「アスペルガー症候群」という精神疾患との関連に焦点を当てて、理解不能な動機が構成される方法を、動機の語彙論と成員カテゴリー化分析の視点から明らかにする。本論文が豊川事件を選んだ理由は、第1に、犯行動機の理解不能性が少年の供述に集約されており、なにが理解不能とみなされたのかが明確であったこと、第2に、犯行と「発達障害」との直接的な関連が明確に否定されたため、最終的にも動機が理解不能なままにとどまったこと、第3に、犯行動機の説明に「発達障害」が初めて用いられた事件あったために、「発達障害」と犯行動機との関連について、より明確に説明がなされたと考えられることである。

## 1.2 先行研究

先行研究としては、第1に、少年犯罪報道における動機の理解不能性についての議論、第2に、少年犯罪の精神医学的説明についての議論、第3に、精神疾患のカテゴリーと犯行動機の関係についての議論がある。

少年犯罪報道における動機の理解不能性についての議論としては、1997年の神

戸連続児童殺傷事件（以下、神戸事件と表記）を論じた平川勝文（2005）、「心の闇」を論じた鈴木智之（2013）、神戸事件を論じた牧野智和（2015）がある<sup>43）</sup>。

平川は、神戸事件の新聞報道の分析から、犯行動機が「行為障害」や「性的サディズム」といった精神疾患によって説明されることにより、学校教育のような環境の被害者としての少年という解釈枠組みが危機に陥ったため、「犯行動機の不可解さ」が構成されたと指摘している（平川 2005）。この知見は、教育的な原因論と医療的な原因論との齟齬に着目して動機を理解不能性を説明した点で参考になる。しかし、後述するように「発達障害」の場合、教育的な原因論も用いられているため、同様の説明が当てはまらないという点で問題がある。

鈴木は、豊川事件も含めて「心の闇」に関する少年犯罪の新聞報道を分析し、フレッド・ドレッスキ（Dretske 1991=2005）による「起動原因」と「構築原因」の区別を用いて、動機を理解不能性の論理構造について明らかにしている。これによると、「どのような条件のもとでその行為がなされたのかを示す」起動原因と、「その条件のもとでなされたことがなぜその行為なのかを示す」構築原因の結びつきが見えない場面において、動機が理解不能とされ、「心の闇」が語られるという（鈴木 2013：146-50）。また、豊川事件についても、事件が「心の闇」をめぐる典型的な語りであり、その動機の不可解さを説明するために「アスペルガー症候群」が用いられたことを指摘している（鈴木 2013：118-24）。この知見は、理解不能な動機の基本的な論理構造を明らかにした点で非常に参考になる。しかし、つぎの2点の問題がある。第1に、動機を理解不能性の論理構造については、人間や動植物、機械にいたるまで、あらゆる行動の原因の理解不能性に当てはまってしまう点である<sup>44）</sup>。第2に、豊川事件については、「アスペルガー症候群」が、なにをどこまで説明しているのかについて分析的に明らかにしていない点である。

牧野は、鈴木の見解に大きな示唆を受けつつ、神戸事件の報道の時系列的展開について、さまざまな新聞や雑誌の分析をしている。その結果、とりわけ全国紙において、事件の起動原因が確信なく提示され、その猟奇性を説明できないために構築原因の前で立ち止まるという報道のパターンが繰り返されたことを明らかにしている（牧野 2015）。この知見は、事件報道の文脈に則して犯行動機を理解不能性を記述した点で参考になる。しかし、つぎの2点の問題がある。第1に、精神鑑定や処遇決定の報道が分析対象から外れているため、精神疾患のカテゴリーと犯行動機を理解不能性の関係については検証されていない点である。第2に、動機を理解不能性に関しては、鈴木の見解を踏襲しているため、鈴木と同様の問題点が指摘できる点である。

少年犯罪の精神医学的な説明についての議論としては、専門家や実践家による文書資料を分析した木村祐子（2008）、戦後の新聞報道を分析した赤羽由起夫（2012）、「発達障害」についての新聞報道を分析した佐久間正弘（2012）、「アスペルガー症候群」に関する新聞記事を分析した渡辺翔平（2018）がある。木村と

赤羽と佐久間の議論は、「発達障害」の用いられ方について、ほぼ共通の知見を提示しているため、はじめに一緒に検討した後で、つぎに渡辺の議論を検討する。

木村と赤羽と佐久間の研究によると、少年犯罪の説明における「発達障害」の用いられ方の特徴は、つぎの2つである。それは第1に、「発達障害」と犯罪との直接的な因果関係が否定されていること、そのため第2に、家庭や学校の教育に事件の原因を帰属するような論理も用いられていることである（赤羽 2012；木村 2008；佐久間 2012）。これらの知見は、少年犯罪の説明における「発達障害」の用いられ方の一般的な特徴を指摘している点で非常に参考になる。しかし、つぎの2点の問題がある。第1に、個別の事件の文脈において「発達障害」がどのように用いられている十分に解き明かせていない点である。第2に、「発達障害」と犯行動機を理解不能性との関連について明らかにできていない点である。

渡辺は、「アスペルガー症候群」に関する新聞記事の事例の1つとして豊川事件の新聞記事を分析し、「アスペルガー症候群」が不可解な動機を理解するための概念として用いられたため、「アスペルガー症候群」が加害者になるリスクとして暗示されてしまったことを指摘している（渡辺 2018：200-6）。しかし、この知見は、実際の新聞記事における論理構造の分析よりも、その記事が与える印象についての考察によって得られた結論である点で問題がある。

以上をまとめると、ここまで検討してきた先行研究では、行動の原因の理解不能性の一般的な論理構造や、「発達障害」の一般的な用いられ方の特徴については明らかにしつつも、具体的な事件報道の文脈における精神疾患のカテゴリーと犯行動機を理解不能性の関係については十分に解き明かせていないということになる。そのため、最後に精神疾患のカテゴリーと犯行動機の関係について論じた大貫孝学・松本洋人（2003）を検討する。

大貫・松本は、成員カテゴリー化分析の視点を用いることによって、1990年に女兒が殺害され、男性が逮捕された「足利事件」の裁判において、どのようにして「小児性愛者」という精神疾患の成員カテゴリーが犯行動機を理解に役立ったのかを明らかにしている。成員カテゴリーには、たとえば、「赤ちゃん」が「泣く」、「母親」が「抱き上げる」というように、一般的に期待される「カテゴリーに結びついた活動」（Sacks 1972b）がある。大貫・松本は、動機もまた成員カテゴリーと結びついていることを指摘した上で、「小児性愛者」という成員カテゴリーの付与が、「幼女」をわいせつ目的で誘拐殺害したという事件の動機を理解を成立させたことを明らかにしている（大貫・松本 2003）。この知見は、精神疾患のカテゴリーが犯行動機を理解可能性を構成した過程や方法を具体的に明らかにした点で参考になる。当然、この知見は、動機を理解不能性について解き明かしたものではないが、動機を理解可能性の成立についての知見からは、動機を理解不能性の成立についても多くの示唆を得ることができる。

### 1.3 分析資料

本論文で用いる分析資料は、『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の東京本社発行の縮刷版から選出した豊川事件に関する記事であり、『朝日新聞』23件、『毎日新聞』27件、『読売新聞』24件である。ただし、社説、コラム、地方面、投書欄は除く。週刊誌報道については、本研究の要点となる12月の精神鑑定結果の報道がほとんどなかったため、分析の対象から外した。

報道の経過は、5月、8月、12月の3つの時期に区分できる。5月は、2日の事件発生から18日の1回目の精神鑑定の実施までの報道（『朝日新聞』13件、『毎日新聞』19件、『読売新聞』15件）、8月は、7日から25日にかけての1回目の精神鑑定の結果についての報道（『朝日新聞』5件、『毎日新聞』2件、『読売新聞』3件）、12月は、16日から27日にかけての2回目の精神鑑定の結果と少年の処遇決定についての報道（『朝日新聞』5件、『毎日新聞』6件、『読売新聞』6件）である。これらのうち、本論文では、少年の動機の理解不能性が報道された5月の報道と、「アスペルガー症候群」が報道された12月の報道を中心に分析する。8月の報道は、「アスペルガー症候群」への言及もなく、処遇決定に採用されなかった1回目の精神鑑定の結果についてのものであり、本論文では取り上げない。

## 2 動機の語彙と成員カテゴリー

本論文が分析に用いる用語は、以下のとおりである。

動機は、「目的動機」と「理由動機」に区別できる。アルフレッド・シュッツによると、目的動機とは、「～するために」という目的として行為者の未来と関連づけられた動機のことである。それはたとえば、「殺人者の動機はその被害者の所持金を奪うことであった」（Schutz [1951] 1962=1983: 138）という動機である。理由動機とは、「～だから」という理由として行為者の過去と関連づけられた動機のことである。それはたとえば、「殺人者はしかじかの環境のもとで育ったから、あるいは精神分析が示すように、彼は子供のときにしかじかの経験をしたから、などといった理由で、彼は殺人という彼の行為を行なうよう動機づけられてきたのである」（Schutz [1951] 1962=1983: 139）という動機である。

起動原因と構築原因の区別について、本論文では、起動原因を「きっかけ要因」と呼び、構築原因を理由動機と同じものと見なす。その理由は、第1に、これらが社会学的になじみのない区別であること、第2に、これらを従来の用語で代替できることである。起動原因とは、「なぜその時に」その行為をしたのかを、行為を起動した条件から説明するものであり（Dretske 1991=2005: 55-86）、これはきっかけ要因と言い換えられる。それはたとえば、殺人者が金に困っていたことや、裕福そうな被害者と遭遇したことなど、殺人が起きた条件のことである。構築原因とは、その時に「なぜその行為をしたのか」を、起動原因によってその行為が引き起こされる過程を構築した過去の条件から説明するものであり（Dret-

ske 1991=2005:55-86), これは因果の適切的な理解という点で理由動機と同一視できる。それはたとえば、殺人者が金に困ったときに(起動原因)、強盗殺人をしてしまった原因であり、先述した理由動機と同じく殺人者の育った環境や子ども時代の経験など、殺人者の性向を形成した過去の物事が当てはまる。

以上をまとめると、動機は、行為の時点から未来を志向する目的動機と、過去を志向する理由動機、行為の時点における条件を指すきっかけ要因に区別できる。

成員カテゴリー化分析の視点からは、つぎの2つの概念を分析に用いる。

1つは、「標準化された関係対」である。標準化された関係対とは、それぞれのあいだにある権利や義務が配分されるような関係対をなす成員カテゴリー対偶である(Sacks 1972a=1995:107)。それはたとえば、夫・妻、親・子为代表的なものであり、加害者・被害者もそのような関係対として把握できる(越川 2010; 大貫・松本 2003)。

もう1つは、「述部」である。述部とは、ある成員カテゴリーが付与されることで、それにもとづいて慣習的に想起される活動、権利、資格、義務、知識、属性、能力などのことである(Hester & Eglin 1997:5; 山田 2001:199)。先述したカテゴリーに結びついた活動もこの一種である。この概念の重要性は、つぎの2つである。第1に、動機も述部に含まれるという点である(Coulter 1979=1998:112-3; 大貫・松本 2003:70)。そのため、たとえば、ある同一の死体を「2児の父親の殺人死体」と言うか、「殺られたギャングの死骸」と言うかによって、それぞれの成員カテゴリーの述部として付与される動機があらかじめ限定されることになる(Coulter 1979=1998:113)。第2に、成員カテゴリーと述部の結びつきが規範的で、一般的に期待される関係であるという点である。ここで規範的というのは、その結びつきに対する期待が抗事実に維持され、期待に反する結びつきが観察されることによって覆らないことを意味する(Sacks 1992:333-40; 鶴田 2008:137-8; 西阪 1997:82-3)。ハーヴィー・サックスは、その反例を退けることができる成員カテゴリーと述部の結びつきの性質を「帰納を免れている」と呼んでいる(Sacks 1992:180)。たとえば、「赤ちゃん」という成員カテゴリーは「泣く」という活動と結びついているが(Sacks 1972b)、泣かない赤ちゃんがいたとしても、それは例外として無視されるか、あくまで「赤ちゃんは泣く」という期待を維持した上で、「泣かないから偉い」「泣かないのはおかしい」といった判断が成立することになる。

### 3 目的動機の理解不能性

本節では、事件の最初の報道(5月2日)から1回目の精神鑑定実施の報道(5月18日)までの新聞報道に着目して、事件の目的動機の理解不能性について分析する。

### 3.1 自己目的殺人の理解不能性

あらためて定義すれば、自己目的殺人とは、殺人を目的動機とした殺人行為のことである。「1. はじめに」で述べたように、豊川事件において「人を殺す経験をしてみたかった」という犯行動機は、その当初から理解不能な動機として扱われ、理解不能なままに終わったものである。そのため、ここでは、この目的動機が理解不能なものであること、すなわち、殺人の動機の語彙として不適切なものだったことを分析の前提としたい。

ところで、犯行動機の理解不能性は、発話された動機そのものだけではなく、犯行の様子や加害者の性格、生活史などといったさまざまな文脈との関係から総合的に判断されるものである。そこで次項では、豊川事件において目的動機の理解不能性を強調することになった加害少年の特徴をめぐる記述を取り上げて分析する。

### 3.2 加害少年の特徴をめぐる記述

以下は、豊川事件の特集記事からの引用である。

「人が物理的にどのくらいで死ぬのか、人を殺したとき自分はどんな気持ちになるのか、知りたかった」

感情の起伏をみせず冷静に答える様子は、二日の逮捕以来変わらない。

.....

頭脳明せきで理屈が先に立つ、自信家で沈着冷静。周囲に流されない、そんな性格は事件の中でも顔をのぞかせる。

面識のない主婦（六四）を選んだ理由は、「若い未来のある人は（殺しては）いけないと思った」から。「完全犯罪を狙った」とも供述した。

家に侵入して主婦と顔を合わせたときに「殺人は社会的にいけないこと、やめるべきだ」とためらったが、一瞬だった。（『朝日新聞』2000.5.8朝刊、34面）

この特集記事には、少年に特徴的な性格や様子に関する記述が集約されている。その要素は大きく2つある。それは第1に、死や殺人に対する少年の興味関心の一貫性と、第2に、死や殺人に対する少年の没感情性である（鈴木 2013：118-24）。まず、死や殺人に対する少年の興味関心の一貫性は、逮捕時から一貫して死や殺人への関心を示す少年の供述や、その興味関心にしたがって計画的に犯行をおこなった少年の様子から記述されている。つぎに、死や殺人に対する少年の没感情性は、逮捕時から一貫して冷静な少年の供述の様子や、被害者と対峙しても一瞬ためらっただけの犯行時の様子から記述されている。

以上のように、豊川事件では、それが自己目的殺人であったことだけではなく、加害少年の死や殺人に対する興味関心の一貫性や没感情性が特徴的な要素と



して報道されたのである。次章では、これらの要素と「アスペルガー症候群」との関連を分析する。

## 4 理由動機の理解不能性

本節では、名古屋家裁による少年の処遇決定についての報道（12月26日）を中心として、自己目的的殺人の理由動機の理解不能性について、「アスペルガー症候群」という成員カテゴリーに着目して分析をおこなう<sup>93）</sup>。

### 4.1 処遇の決定

以下は、少年の処遇決定を報じた記事である。

決定理由で岩田裁判官は、少年について他人への共感性の欠如▽抽象的概念の形成が不全▽想像力の欠如▽強いこだわり傾向がある――と認定した。そのうえで、家裁実施の精神鑑定結果を踏まえて、少年の症状を「高機能広汎性発達障害あるいはアスペルガー症候群」と判断した。責任能力については「理非善悪を弁別する能力が著しく減退していた」と示した。高機能広汎性発達障害が犯罪を誘発する要因ではないと付け加えた。

動機については「かねて『人の死』に関心があり、発展して『人の死が見てみたい』との思いを漠然とするようになった」と指摘、「一度決めたことは貫徹しなければならないとの思考癖があり、テニス部退部で心に空白が生じたことも契機となって、断続的に考えてきた殺人体験の実行を決意した」と判断した。（『毎日新聞』2000.12.26夕刊、1面）

この記事では、第1に、少年は「アスペルガー症候群」であるものの、それが犯罪の要因ではないとされたこと、第2に、「人の死」への関心が発展したことが犯行の動機であると説明されていること、第3に、テニス部退部が犯行の契機となったことが指摘されたことの3点が読み取れる。これらを整理すれば、「人の死」への関心が理由動機、テニス部退部がきっかけ要因ということになる。そうだとすれば、「アスペルガー症候群」は、少年の行為のなにを説明したことになるのだろうか。以下では、第1に、どのようにして「アスペルガー症候群」が犯罪の要因ではないと説明されたのか、第2に、なにを「アスペルガー症候群」は説明したのかについて分析し、最後に犯行動機の理解不能性について明らかにする。

### 4.2 理由動機としての精神疾患

ここではまず、成員カテゴリーと動機の関係について予備的な考察を加えておきたい。

ある成員カテゴリーを付与するだけで動機が理解可能になる場合、成員カテゴリーとその述部の行為や動機とが規範的に結びついている必要がある。たとえば、泣いた赤ちゃんを抱き上げた女性にその動機をたずねた場合、その女性が赤ちゃんの「母親」だからと答えれば、私たちは十分に理解するだろう。なぜなら、泣いた赤ちゃんをあやすために抱き上げるという行為や動機は、「母親」という成員カテゴリーと規範的に結びついているからである。精神疾患が理由動機として理解される場合も同様である。たとえば、1960年代に多く報道された「受験ノイローゼ」の場合、「派出所へ火炎ビン 受験ノイローゼ高校生」（『読売新聞』1968.7.9夕刊、11面）という見出しを見ただけでも、当時の人びとは十分にその動機を理解できただろう。なぜなら、「受験ノイローゼ高校生」という成員カテゴリーを付与するだけでも、受験競争に巻き込まれうる中流以上の家庭の出身であるとか、受験生特有の悩みや苦しみによるノイローゼの発病、さらにノイローゼの症状としての逸脱行為にいたるまで、それと結びつく行為や動機を容易に想起できたと考えられるからである。

しかし、「アスペルガー症候群」の場合に必要なのは、それが当時の人びとにとってなじみのない新しい成員カテゴリーだったという点である。そのため、「アスペルガー症候群」が付与されただけでは、その述部を慣習的に想起できない人びとにとっては、動機の説明にはならないのである。そのため、「アスペルガー症候群」について報じる新聞記事は、精神医学や司法の専門家が、素人である読者に「アスペルガー症候群」の正しい述部を提示するという実践として捉えることができる。

以上をふまえた上で、「アスペルガー症候群」について分析したい。以下は、「アスペルガー症候群」に対する各新聞での専門家のコメントである。

多くのアスペルガー症候群の子はいじめなどの被害にはあっても、加害者になることは少ないことを理解してほしい<sup>(6)</sup>（『朝日新聞』2000.12.26夕刊、14面）

アスペルガー症候群は自閉性障害の一つだが、本来いたって平和的で凶暴性のない障害であり、心身耗弱と言い切れる状況にはならない。一般的には起こさない犯罪をどうして起こしたのか、それが解明されていない印象を受ける。<sup>(7)</sup>（『毎日新聞』2000.12.26夕刊、9面）

海外の報告例では、アスペルガー症候群を持つ子供の累犯性は一般の子供より少なく、継続的な治療教育で多くは問題なく生活できている。今回のように犯罪に結び付くのは、非常にまれなケース。この少年の場合、何らかの理由でこだわりの対象が人の死に向かってしまった<sup>(8)</sup>（『読売新聞』2000.12.26夕刊、15面）

これらのコメントは、いずれも「アスペルガー症候群」と犯罪との関連を否定している。つまり、「アスペルガー症候群」という成員カテゴリーは、その述部として犯罪に結びつくような行為や動機を含まないものとして説明されている。ここで見られるのは、成員カテゴリーと述部との結びつきが規範性をもち、一般的な期待として成立するのを否定する実践である。つぎの3つの実践を分析的に区別できる。

第1に、成員カテゴリーと述部が結びつきを否定するための帰納法の実践である。ここでは、「アスペルガー症候群」と犯罪が結びつかない事例が例外として退けられず、帰納法における反証として積極的に用いられている。先述したように、成員カテゴリーと述部の結びつきは帰納を免れる性質をもつが、「アスペルガー症候群」と犯罪との結びつきは帰納によって退けられてしまっているのである。

第2に、成員カテゴリーと述部が結びつかないことに規範性をもたせ、その関係のほうにこそ一般的な期待を成立させる実践である。ここでは、「アスペルガー症候群」と犯罪の結びつきが例外であると示され、「アスペルガー症候群」と犯罪が結びつかないことこそが一般的に期待される関係であると示されている。

第3に、成員カテゴリーを加害者と関連づけるのではなく、逆に標準化された関係対の対偶に当たる被害者と関連づける実践である。ここでは、「アスペルガー症候群」が加害者ではなく、被害者になることがあると指摘することで、「アスペルガー症候群」と犯罪との結びつきが否定されている。

以上の3つの実践は、成員カテゴリーと述部との結びつきを否定するという消極的なものではなく、成員カテゴリーと述部との切り離しという積極的な実践とみなすこともできるだろう。すなわち、「アスペルガー症候群」は、犯罪と関連する述部と積極的に切り離された成員カテゴリーなのである。ある成員カテゴリーに一般的に期待される活動を、カテゴリーに結びついた活動と言うのであれば、これは逆に「カテゴリーから切り離された活動」なのである。

#### 4.3 「アスペルガー症候群」が説明したもの

「アスペルガー症候群」と犯罪との結びつきは否定されたものの、「アスペルガー症候群」がなにも説明していないわけではない。つぎの記事も、処遇の決定を報じたものであり、先にあげた記事よりも具体的に犯行と精神疾患の関係について説明している。

さらに決定は、少年が、殺人事件をごく普通の出来事ととらえ、自分の事件が社会に衝撃を与えたことを奇異に感じている点を挙げて、「自己の夢を語ることも容易に行えないなど想像力の欠如がみられる」「被害者の悲しみや苦悩に思いを致すことはなかった」とも指摘する。

そして、少年の心理について次のように分析している。

「強い『こだわり傾向』が認められ、反復的な興味の追求傾向がある」

「こだわりはパターン化した行動様式になって現れ、パターンが崩れるとき大きな不安を喚起する。部活に打ち込むことで生活のパターン化を図ってきたが、この終了が不安を誘い事件を敢行するきっかけになった」(『読売新聞』2000.12.26夕刊、1面)

ここで説明されているのは、つぎの2点である。

第1に、「アスペルガー症候群」は、少年に特徴的な性格や様子について説明している。たとえば、興味関心の一貫性や没感情性の問題は、興味関心への「こだわり傾向」や他者への共感性の欠如というかたちで「アスペルガー症候群」の特徴の1つとして指し示している。つまり、殺人は「アスペルガー症候群」の述部として指し示されなかったが、興味関心の一貫性や没感情性は述部として明示されたのである。しかし、犯行動機との関連で注意が必要なのは、「アスペルガー症候群」は、「こだわり傾向」のように少年の興味関心の追求の仕方について説明しているものの、死や殺人のように少年が興味関心をもつ対象までは説明していないことである。

第2に、「アスペルガー症候群」は、犯罪のきっかけ要因について説明している。事件は、テニス部退部がきっかけであるとされたが、それは「アスペルガー症候群」の特徴である「こだわり」によるパターン化した行動様式と、それが崩れたことによる不安によるものとして説明されたのである。

以上のように、「アスペルガー症候群」は、自己目的的殺人の理由動機については説明しなかったが、少年の性格や様子、犯行のきっかけ要因については説明したのである。

#### 4.4 犯行動機の理解不能性と「アスペルガー症候群」

以上の分析から、豊川事件における犯行動機の理解不能性と「アスペルガー症候群」の関連についてまとめれば、つぎのようになる。すなわち、「アスペルガー症候群」という成員カテゴリーの述部には、殺人という行為も、「人の死」への関心という理由動機も含まれていないため、自己目的的殺人の理解には役立たないものだったのである。しかし、その一方で、「アスペルガー症候群」は、死や殺人への関心と直接に結びつかない少年の性格や様子、犯行のきっかけ要因については説明していた。このように、「アスペルガー症候群」は、自己目的的殺人の理由動機からは切り離されながら、それ以外の要素とは結びついた成員カテゴリーであったのである。

その結果、「アスペルガー症候群」は、犯行動機を説明しなかっただけでなく、新たな謎を増やしたとも言える。なぜなら、「アスペルガー症候群」の犯行動機は、「少年」の犯行動機よりも説明が困難だからである。先にあげたコメントを

引用すれば、ただの「少年」とは違い、「アスペルガー症候群」は、「本来いたって平和的で凶暴性のない障害であり」、「犯罪に結び付くのは、非常にまれ」であるはずなのに、「一般的には起こさない犯罪をどうして起こしたのか」という疑問がさらに付け加わることになったからである。

## 5 おわりに

以上で明らかにしたように、犯行動機が理解不能なものとして社会的に構成されたのは、精神疾患のカテゴリーと動機とが切り離されて用いられたからであった。豊川事件の場合、「アスペルガー症候群」は、少年の性格や様子、犯行のきっかけ要因とは結びついてはいたが、自己目的的殺人の動機とは切り離されて用いられたために、動機以外の要素を理解可能にした一方、肝心の犯行動機を理解不能にする帰結を導いたのである。要するに、「アスペルガー症候群」という語彙はあったものの、それを犯行動機と切り離すという文法によって、犯行動機は理解不能になったのである。つまり、動機が理解不能なのは、動機の語彙がないからではなく、動機の文法があるからなのである。

ところで、なぜこのように動機を理解不能にする実践がおこなわれるのだろうか。あくまでも仮説的に考察するなら、つぎのことが考えられる。それは、精神疾患を犯罪と結びつけるような偏見を避けるための実践が、意図せざる結果として動機を理解不能性を生んだことである。少年犯罪報道では、1970年代以降、報道倫理の向上により、精神疾患のカテゴリーを用いることがなくなり（大庭 2010）、2000年代以降、「発達障害」が用いられるようになって、犯罪との直接的な因果関係は否定されるようになっていく（赤羽 2012；木村 2008；佐久間 2012）。実際、豊川事件でも、『朝日新聞』が「アスペルガー症候群」と犯罪との結びつきを「偏見」（『朝日新聞』2000.12.26夕刊、14面、見出し）であると指摘している。牧野は、神戸事件において、少年の異常性に事件を帰属しない新聞メディアのある種の「良心」が、事件の解決不可能性を生んだことを指摘している（牧野 2015：138）、これと同様のことを豊川事件でも指摘できるだろう。

ここから示唆されることは、どのような状況にしても、私たちは、動機を理解不能にする実践を適切におこなうことが可能だということである。そのため、動機を理解不能性は、人びとによる動機の実践の失敗としてではなく、動機を理解不能にする実践の達成として記述されるべきなのである。

### 〔注〕

- (1) 下村哲夫・早稲田大教授(教育学)のコメント。肩書きは、新聞記事による。以下、同様。
- (2) 加藤幸雄・日本福祉大副学長(非行臨床心理学、元家裁調査官)のコメント。
- (3) 「心の闇」に関しては、赤羽（2013）と牧野（2008）もあるが、「心の闇」

が用いられた社会的背景について主に論じている議論のため、ここでは検討しない。

- (4) これは、そもそもドレッツキの議論が、人間や動植物、機械までを含めた行動の原因のすべてを包括する議論だからである。
- (5) 本節で提示する記事は、記者、裁判官、専門家といった複数の主体の文章によって構成されているが、いずれの記事も、裁判官による処遇決定の紹介を中心として、それを補足するように記者や専門家の説明が有機的に配置されている。そのため、それぞれの主体の文章によって「アスペルガー症候群」のカテゴリーの使用方法に齟齬は生じていない。
- (6) 杉山登志郎・静岡大学教授（児童精神科）のコメント。
- (7) 加藤幸雄・日本福祉大副学長（非行臨床心理学、元家裁調査官）のコメント。
- (8) 中京大の辻井正次助教授（臨床心理士）のコメント。

#### 【文献】

- 赤羽由起夫, 2012, 「少年犯罪と精神疾患の関係の語られ方——戦後の新聞報道の分析を通じて」『犯罪社会学研究』37: 104-18.
- , 2013, 「なぜ「心の闇」は語られたのか——少年犯罪報道に見る『心』の理解のアノミー」『社会学評論』64(1): 37-54.
- Blum, Alan F. & Peter McHugh, 1971, “The Social Ascription of Motives,” *American Sociological Review*, 36: 98-109.
- Coulter, Jeff, 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan. (=1998, 西阪仰訳, 『心の社会的構成——ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジの視点』新曜社.)
- 土井隆義, 1988a, 「犯罪動機の知識社会的考察——ラベリング・パースペクティブと動機付与論」『ソシオロジ』33(2): 61-76.
- , 1988b, 「刑事司法過程における犯行動機の構成」『犯罪社会学研究』13: 102-21.
- Dretske, Fred, 1991, *Explaining Behavior: Reasons in a World of Causes*, Cambridge: The MIT Press. (=2005, 水本正晴訳『行動を説明する——因果の世界における理由』勁草書房.)
- Hester, Stephen & Peter Eglin, 1997, “Membership Categorization Analysis: An Introduction,” Stephen Hester & Peter Eglin eds., *Culture in Action: Studies in Membership Categorization Analysis*, Lanham: University Press of America, 1-23.
- 平川勝文, 2005, 「少年犯罪事件犯行動機における物語——『神戸連続児童殺傷事件』の新聞報道を事例に」『中央大学大学院研究年報』34: 83-95.
- 狩谷あゆみ, 1998, 「法廷における犯行動機の構成と被害者のカテゴリー化——

- 『道頓堀野宿者殺人事件』を事例として』『社会学評論』49(1): 97-109.
- 木村祐子, 2008, 「少年非行と障害の関連性の語られ方——DSM 型診断における解釈の特徴と限界」『人間文化創成科学論叢』11: 227-36.
- 越川葉子, 2010, 「少年犯罪被害者の語りにおける成員カテゴリー化実践——被害当事者の手記分析を通して」『立教大学教育学科研究年報』53: 183-96.
- , 2012, 「加害少年の『謝罪』概念に関する覚書——新聞記事を事例として」『立教大学教育学科研究年報』56: 67-76.
- 牧野智和, 2008, 「少年犯罪をめぐる『まなざし』の変容——後期近代における」羽濑一代編『どこか〈問題化〉される若者たち』恒星社厚生閣, 3-24.
- , 2015, 「神戸・連続児童殺傷事件報道の再構成／再検証——『心の闇』というニュース・フレームの形成・定着過程を中心に」『人間関係学研究』17: 127-44.
- Mills, Charles W., 1940, "Situating Actions and Vocabularies of Motive," *American Sociological Review*, 5: 904-13. Reprinted in: Irving L. Horowitz ed., 1963, *Power, Politics and People: The Collected Essays of C. Wright Mills*, Oxford: Oxford University Press, 439-52. (=1971, 田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房, 344-55.
- 西阪仰, 1997, 『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』金子書房.
- 大庭絵里, 2010, 「メディア言説における『非行少年』観の変化」『国際経営論集』39: 155-64.
- 大貫孝学・松本洋人, 2003, 「犯行動機の構成と成員カテゴリー化実践——いわゆる『足利事件』における精神鑑定めぐって」『犯罪社会学研究』28: 68-81.
- Sacks, Harvey, 1972a, "An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology," David Sudnow ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74. (=1995, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学』マルジュ社, 93-173.)
- , 1972b, "On the Analyzability of Stories of Children," John J. Gumperz & Dell Hymes eds., *Directions in Sociolinguistics: The Ethnomethodology of Communication*, New York: Rinehart and Winston, 325-45.
- , 1992, *Lectures on Conversation Volume 1*, Oxford: Blackwell.
- 佐久間正弘 2012 「『犯罪と発達障害の関連性』についての言説の検討——新聞による報道の検討を中心に」『現代の社会病理』27: 113-25.
- Schutz, Alfred, 1951, "Choosing among Projects of Action," *Philosophy and*

- Phenomenological Research*, 12(2):161-84. Reprinted in: Maurice Natanson ed., 1962, *Collected Papers 1: The Problem of Social Reality*, Den Haag: Martinus Nijhoff, 67-96. (=1983, 渡部光訳「行為の企図と選択」モーリス・ナタンソン (編)『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻——社会的現実の問題 1』マルジュ社, 135-72.
- 鈴木智之, 2013,『「心の闇」と動機の語彙——犯罪報道の一九九〇年代』青弓社.
- 鶴田幸恵, 2008,「正当な当事者とは誰か——『性同一性障害』であるための基準」『社会学評論』59(1):133-50.
- 渡辺翔平, 2018,「想定されるリスク——アスペルガー症候群に関する新聞記事の議論」『人間社会学研究集録』13:195-219.
- 山田富秋, 2001,「成員カテゴリー化装置分析の新たな展開」船津衛編『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣, 189-210.